

古ハ如何ナル形ニ製シケン、今世ハ三都トモニ菱形ニ造リ、京坂ニテハ蓬ヲ搗交ヘ、青粉ヲ加ヘテ綠色ヲ美ニス、江戸ハ蓬ヲ交ユルハ稀ニテ、多クハ青粉ニテ綠色ニ染シノミ也、因ニ云江戸ニテハ大概クサモチ、京坂ニテハヨモギ餅ト云也、

○按ズルニ、三月三日ノ草餅ノ事ハ、歳時部三月三日篇ニ在リ、參看スベシ、

〔名菓秘録 二篇〕草餅

一よもぎを小筋を取、早稻藁のあくにて和らかにせんじ、水すみぬるほど、幾度もあらひ能つき、其後こわ飯を入つき交せ、餅に丸めるなり、

〔倭訓栞 前編十五〕ちまき。

粽をよめり、新撰字鏡、倭名抄に見ゆ、糰も同じ、茅卷也、今は篠の葉葦の

葉菰の葉などにて包めり、伊勢物語にあやめかりとよみたれば、菖蒲にても包てんか、略○中道喜ちまきは京都市人の名也、朝比奈ちまきは駿州朝ひなの人民造る所也、紀州にいふは絹まき也、

〔古今要覽稿 時令〕ちまき糰

ちまきは和名にして、漢名を糰、或は角黍ともいひて、類聚名義抄、新撰字鏡、和名類聚抄等に見え、たれば、此以前よりつくりてもてはやせし事しられたり、しかれば千有餘年の昔より、五月五日粽を用る事ながら、國史式等には所見なければ、當時供御には備へざるものとしられぬ、さて粽の説さまざまあり、續齊諧記には、楚の屈原が故事を擧、風土記には陰陽包裹未散形に象るといひ、唐の世にいたりては、宮中の戯れ事となれり、此事天寶遺事に見えたり、抑ちまきと名付るは、茅の葉を以てむかしはまきたるゆゑ、茅卷といふ由、契沖阿闍梨、加茂真淵、山岡明阿の説なり、さもあるべし、又かざり粽の事は、伊勢物語、拾遺和歌集等に見えたり、是續齊諧記にはゆる棟の葉をもてまとひ、五綵のいとをもて、縛之と見えしものなるべし、綠粽は、熱田社祝詞に見えたり、